

開かれた英語教育を目指して： ティームティーチングからコラボラティブティーチングへ

岩田 聖子

An Innovative Approach to Open English Education at Otemon University:
From Team Teaching to Collaborative Teaching

Shoko Iwata

key words : team teaching, collaborative teaching, cognitive theory, sociocognitive theory, association of English learning with other subjects at the same department

1. はじめに

2015年4月に新設された追手門学院大学地域創造学部で、同一シラバス同一テキストによる英語教育が始まった。新設であればこそそのタイミングであったが、2年目を迎えその教育効果への関心もさらに高まりつつあるように思える。これまでの英語教育は、概して学部授業科目間の関連性を考慮したcontent based teachingというより、各教員が個々の信条に従ってそれぞれのメソッド、アプローチを用いて自由に教材・テーマを選択してきた。英語教育そのものは、明治時代以降の英語教育の中心である訳読が長きにわたり引き継がれ、その後オーディオリンガル法と呼ばれる反復練習を経て、言語コミュニケーション能力を高めるためのコミュニカティブ英語教育に移行し、現在様々なニーズに対応する英語教育がなされてきている。しかし、これほどさかんに、英語教育や英語学習について論議されている時代も少ない。グローバル化やボーダレスの今、大学英語教育の在り方も変革の時を迎えており、様々な大学が英語教育変革に着手している。追手門学院大学でも外国語教室の立ち上げ等、例外ではない。そこで本稿でも、追手門学院大学基盤教育の一環として、2年前に始まった地域創造学部での英語教育プログラムの取り組みについて述べていく。

地域創造学部での英語教育の中心となるのが、Collaborative Teachingの概念である。同学部同学年同一科目を担当する英語教員が連携し、お互いの情報知識を共有し質の高い授業を目指すもので、そこから発展した形として、学習内容の過程を共同で協議し、相互に責任を共有した上で、学習者の利益を優先にしつつ教員側の負担減を考慮するという意味でのCollaborative Teachingの実施である。その点で、Team Teachingの概念とは一線を画している。そこで、本稿では、従来のTeam Teachingの概念を整理したうえで、現在の大学内英語教育の現状を述べ、Collaborative Teachingに至る学習理論、実稼働している地域創造学部における授業の取り組みについて述べていく。

2. Team Teachingの概念

Team Teaching（以下TT）とは、複数の教員が協力して授業を行う指導方法の総称であり、協力的な教授または、協力的な指導と呼ばれ、「TT方式」とも略称されている。TT方式は、1957年にマサチューセッツ州レキシントンのフランクリン小学校に始まり発展したレキシントン・ティーム・ティーチング・プログラム（LTTP）であるといわれている。その開発当初のねらいは、教員組織の階層性（チームリーダー、シニアティーチャー、ティーチャー、ティーチャーエイドの縦組織）という職階制の導入による優秀な教員の転出防止、教員不足の解消、教員間の協力体制であった。その6年後の1963年、日本で初めて東京都内の小学校にTT方式が導入されたが、そこでは学級担任制を前提とした教授組織で生じる問題点を補う補助的な方法の一つと捉えられた（福山、2014）。その後、1968年の学習指導要領で「指導の効率を高めるため、教師の特性を生かすとともに教師の協力的な指導の工夫をすること」と示されその研究実践が勧められるようになった。日本におけるTTとは、一つのクラスに担当教員の他に、外国語指導助手Assistant Language Teacher（ALT）、数学、理科、体育など個人指導の充実に向けた非常勤講師の補助教員を配置したり、小1プロブレムに対応するための措置、不登校等生徒指導上の諸課題への対応をしたりするものであった。このような様々なTT方式の取り組みに対し、J. T. Shaplin（1966）が「授業組織の一様式で、教職員と彼らに割り当てられた生徒を含み、二人もしくはそれ以上の教師が、協力して、同じ生徒グループの授業全体、またはその主要部面について責任をもつ」と定義したのをはじめ、他の研究者も次々とTT方式の概念を提唱した。ShaplinをはじめとしたTTの概念（中尾、2011・重松他、1995）をまとめたものが次の表である。

表1 Team Teachingの概念

研究者（年）	内 容
Shaplin （1966）	授業組織の一様式で、教職員と割り当てられた生徒から成り、2人もしくはそれ以上の教師が、協力して同じ生徒グループの授業全体、またはその主要部面について責任をもつ
日俣 （1966）	授業改善、学校組織の改造、それらに関連させる学年ごとの組織の改善のために、単位学級を2人以上の教師が受け持つ二人担任制ではなく、複数の教師が協力して指導を行う
加藤 （1994）	教師と共に子供たちも一つのチームを作り、協力し合って、指導し、学ぶ新たな指導学習組織である
加藤ら （1995）	教育現場によって下記のTTの特性を組み合わせたか、どれかを強調したり、一元的ではなく多様性を持つ柔軟なとらえ方をする必要がある ①教師が同じ子供のグループの授業に共同である ②2人もしくはそれ以上の教師で組織されている ③授業において教師が一定の責任分担のもとで密接な協力関係がある ④指導の効率を高めるため、指導内容や方法に創意工夫がある ⑤各教師の特性が生かされている ⑥学習者のグルーピングに弾力性がある ⑦学習スペースの配置に多様性がみられる ⑧学習時間の長さに柔軟性が見られる
高浦（1995）	教師がチームを組んで協力して学習者の指導に当たる指導方式である

そして、地域創造学部における英語教育に近い概念を持つのが、加藤ら（1995）が示すTT方式であるが、各教員が一定の責任分担を受け「協力」的に学部英語教育を行うというより、話し合いを重ねて共通の意識を持った「協働」的な英語教育指導を目指しているため、Team Teachingという言葉では言い表せない概念があり、より密なより共同的な指導という意味を含有するCollaborative Teaching（CT）が現在地域創造学部で行っている英語教育プログラムに当てはまる。

3. 現状について

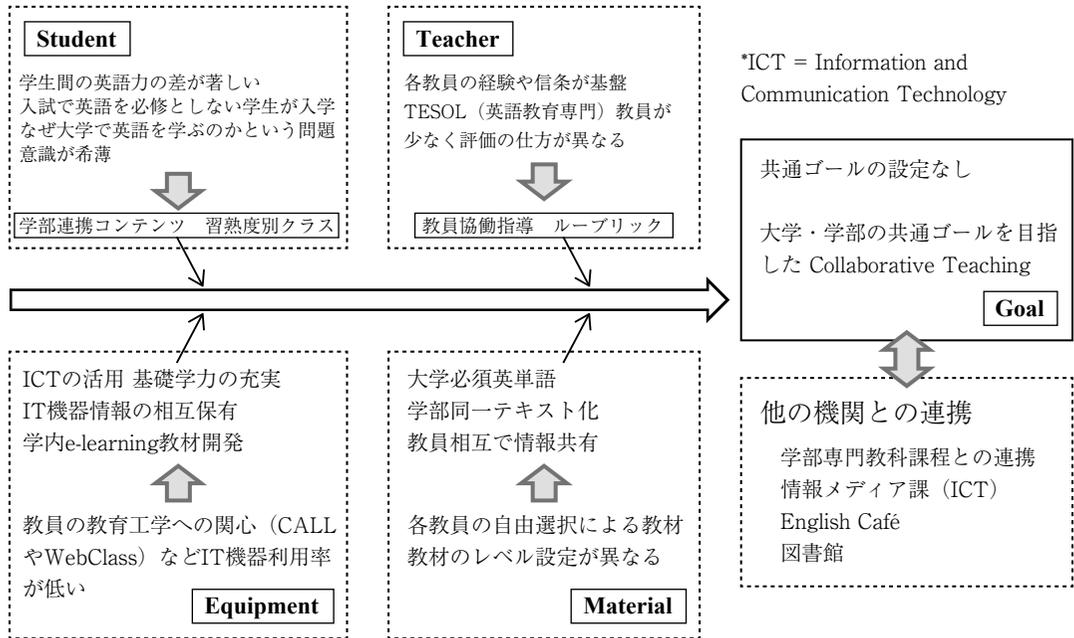
そもそも大学教育における専門性の高い授業科目は、授業科目間の関連性を意識するまでもなく学部それぞれのカリキュラムに従っており、科目間の相互作用をなしている。一方、英語に関しても、特に一般教養科目としての英語科目では、授業科目間の関連性はなく、各教員がそれぞれのメソッド、アプローチを用いて自由に教材を選択しテーマを選択し、評価基準もさまざまであった。これを自己完結型英語教育（重森、2016）と呼び、お互いの領域に越境していけないと言った暗黙の了解がある。

追手門学院の英語教育に関していえば、2015年の地域創造学部が続いて、2016年より社会学部も同様に、学部科目を意識した同一シラバス同一テキストを用いた英語授業を行うことになり、2016年春開講の基盤教育における134英語科目のうち、35クラスが同一シラバス同一テキストを用い、うち30クラスが学部科目との連携を意識した英語授業を行うことになったが、残り99クラスは様々である。表2は、2016年度各教員が選択した英語講読テキストの一部である。コンテンツを取り上げてみると、地域創造学部は学部学科授業と関連する日本文化・世界遺産、社会学部は現代社会の問題を取りあげたテキストを採用しているが、経済、心理、経営学部のテキストは異文化、ビジネス、エッセー、文学などコンテンツが多岐にわたっている。教科書レベルは、Low-intermediate・TOEIC400-600・英検準2級・CEFRA2といった同レベルからの選択が多く、教員の学生に対する英語レベルはほぼ同意がなされているように見受けられる一方で、TOEIC550-700からElementary Level・TOEIC300-400にいたるまで英語レベルの違いが出ている。

テキストタイトル及びレベルのみを、一部をピックアップした下記テキスト（表2）だけでもその授業シラバスの内容、評価、目標も様々であり、大学また学部として目指す英語教育目標の設定は、個々の担当教員に任された自己完結型の英語教育となっている。同一シラバス同一テキストを採用する2014年以前はさらに混沌としていたのは容易に想像がつくと思われる。テキストの他にそれに関連するハンドアウトおよび評価は、言い換えれば「大学及び学部の求める英語」という学部内教員相互のコンセンサスを設けていないという結果で、このような課題に対する解決として、共通のゴールを目指す新たな英語教育の取り組みの枠組みを提案し、そこには教員相互の密な連携と学部統一テキストがカギとなると思われる。

表2 2016年春学期選択テキスト

Text Title (学部学年) * textbook for collaborate teaching classes	Level
*Trend Watching (社会1年)	TOEIC550-730
*Let's Introduce Japanese Culture (地域創造1年)	TOEIC550-730
*Exploring World Heritage on DVD (実用英語地域創造2年)	TOEIC550-730
Hot Topics 2 (マーケティング・経営1年)	Intermediate TOEIC550-730
Even More True Stories (マーケティング1年)	Intermediate TOEIC550-730
Enjoy English with Charlie Brown and Friends (心理1年～・地域・社会2年)	TOEIC450-600
Global Concept (地域・社会・心理・国際2年)	TOEIC400-600
BBC World Profile on DVD (経済1年)	TOEIC400-600
Global Business Trend (経済2年)	TOEIC400-600
American Dynamics (経済1年・経済2年・経済再履修)	TOEIC400-600
Burning Issues (経済再履修)	Pre-intermediate
Essential reading I (経営1年)	TOEIC400-500
Cultural Portraits: Japan and the US (心理1年～・地域・社会2年)	TOEIC400-500
LIGHTING UP THE TOEIC TEST (経済2年)	TOEIC400-500
Reading Cycle (経営2年)	TOEIC400-500
Real Reading 1 (マーケティング1年)	TOEIC400
enjoyable Reading II (経済1年・心理1年～地域・社会2年)	TOEIC300-400
Reading Stream (経済再履修)	TOEIC300-400
English Insight (経済1年)	TOEIC300
World English Intro Second Edition (経済2年)	TOEIC250-450
*Take It Easy (学年学部横断型 基盤教育)	Low-intermediate
Reading Power 2 4th edition (経済1年)	Low-intermediate
Learn the Differences, Broaden Your World! (経済1年)	Low-intermediate
Handout (地域・社会・心理・国際)	



(図1)

4. 新たな英語教育プログラムと学習理論

次に、新たな英語教育プログラムを行うにあたって、指針となる第二言語習得理論についてここで述べる。1960年代後半に、第二言語習得の理論的背景が構築されると、trial and errorに代表される構造分析が主流となりドリル（反復）練習が全盛を迎えた。Audio-lingual habit Theoryに基づいたイリノイ大学のPLATO (Programmed Logic for Automatic Teaching Operations) ドリル、パターンプラクティスの一方向性のCALL教育が一層拍車をかけることになった。そこに異議を唱えたChomsky (1975) の脱行動主義によって、言語習得理論は一気に認知主義へと変遷した。そして、認知主義理論と社会文化理論の両面からのアプローチとしての現施行中の英語教育プログラムの背景理論が次のとおりである。まず、認知主義理論では、言語習得を認知のプロセスと考えて、学習者の内的認知プロセス（学習者の気づき、仮説検証、記憶と検索など）を引き起こす要因として、学習者同士また学習者と指導者との相互作用に学習のメカニズムがある点に注目し、社会文化理論は、言語学習には、社会的側面と認知的側面があり、学習者は社会的存在であるため、すべての知的発達（言語学習を含む）は社会的なやり取りの中にある (Storch, 2013) 点に注目している。

上記の認知主義的学習理論では、まず現在の知識よりもわずかに上回りかつ理解可能なインプットを行うことで学習者の学習を進めるというKrashen (1981) のinput仮説に基づいて、Long (1983) は、現在の知識を超えたインプットが理解可能になるのは、お互いの会話の中で成り立つとした。そこに、Swain (1985) が、言語習得にはインプットと同時にアウトプットを行う必要性を挙げ、その相互作用で言語処理をより強化するとした。加えてLong (1996) がnegative feedbackをすることで、

表3 Collaborative Teaching の学習理論

認知主義 理論	Input hypothesis Krashen (1985)	外国語習得の必要十分条件として現在のL2（第2外国語）知識より少し超えた理解可能なインプット $i + 1$ が必要
	negotiation for meaning Long (1993)	現在の知識を超えたインプットが理解可能になるのは、会話中のやり取りによる修正を行うからである
	Output hypothesis Swain (1985)	理解可能なインプットだけではなく、文法的な正確さの向上を求めるアウトプットをすることで、言語をより深く処理し、より長い記憶が可能になる
社会文化 理論	Scaffolding Vygotsky (1934)	熟達者（大人や、より知識のある仲間）が未熟者（子供や、より知識を必要とする仲間）に対して行う scaffolding（足場かけ）と呼ばれる社会的やり取りが認知の発達には必要であり、社会的な外言が内的な内言となり、特に未熟者の知識や思考が発達する
	Languaging Swain (2006)	会話のやりとりでは、言語をもちいて複雑な情報の理解や問題解決がなされる。さらに問題解決だけでなくその過程で新たな知識と理解が構築される。つまり言語を通じて思考が明確化し言語化されたものをさらに検討することが可能になる

より正確な安定さを促進させると述べた。上記の仮説は、情報交換タスクである speaking では意味重視となって正確さが伝わらず、writing を含むタスクを行うことで、意味の理解をしつつ言語形式に注意を向けることができるとしてある。つまり、writing をもとに speaking を組み合わせたタスクをすることで学習の効果が促進されるというものである。

もう一方の社会的理論では、Vygotsky (1934) の最近接発達領域が挙げられる。指導者あるいは学習者よりもより知識のある仲間が援助をすることで、より知識の少ない学習者が達成できる学習状態をあらかじめ知っておく、つまり学習者と指導者あるいは知識のある仲間との距離の重要性を言う。そこにグループワークやペアワークなどを行い学習者間でのお互いに少しずつ責任を負わせていく scaffolding（足場かけ）の状況を作ることで、各人がその知的能力を発達させる機会を共同的に構築(Lantolf, 2000)できるようになるという説である。Swain (2006) はその後、言語を用いることで、複雑な情報の理解や難しいタスクへの対処を試みる認知プロセスを経て、問題解決だけではなくその過程で新たな知識と理解が構築される languaging 仮説を発表した。Storch (2013) はこの一連のプロセスが言語習得のカギとなるとし、特に writing のテキストをグループワークやペアワークで協働して作成するための協議を行うことで思考の言語化がすすみ、読み直し修正するためにより言語学習が効果を生むと提唱する。

このような理論に基づき学習者同士が協働で言語習得にあたるために構築したのが次に述べる地

域創造学部のcollaborative英語教育プログラムである。

5. 地域創造学部英語教育プログラム

本プログラムは、次の3本の柱からなっている。

A. 学部テーマに沿った教材選択

「地に足。世界にまなざし。 将来の進路は全国、そして世界へ。」

学部の三本柱と英語教育ゴール

- 地域経済・行政 公務員TOEIC600点
- 観光とまちづくり 地域活性化観光英語 2020東京オリンピック
- 日本文化 伝統文化、アニメ、技術力を英語で表現

B. 1年生から2年生へ連続性を持たす英語教育

input（知識の習得）からoutput（writing, speaking, presentation）へ

1年時：英語講読及び英会話各6クラス 2年時：統合型実用英語6クラス

クラスの構成は教員一人に学習者30名

C. 指導に当たる英語教員間の協働作業

上記に従って教材選びシラバス作成に取り掛かった。さらに、この英語プログラムでは教員同士のCollaborative Teachingがそのカギとなるため、初年度の人材確保に、さまざまな学会会合に出向き直接話を伺い、協力的かつ同様の責任を共有し協働的教育指導に理解を示していただける人材を選定していった。かなりの時間を要したが協力的な先生方に巡り合い、質の高い授業内容を実現することが可能になった。というのは、以下のように、共通の意識を持った「協働」的な英語教育のために、授業が始まるまで協議を重ねて目標を設置する必要がある、非常勤の先生方との共同作業であったため、着任前より英語教育のために真摯に向き合っていた先生方の選出が必要であった。また、授業開始後も、課題のフィードバックのために時間を割いていただく必要があったため、先生方の人選には一方ならぬ思いがあった。以下、4月顔以降に向けた共通シラバスに向け協議及び教員間情報共有メモである。

第1回2015年1月6日 当大学にて（非常勤予定者（非）2名、筆者）

学部テーマ テキスト互選 地域創造学部としての単語帳の選定

教材候補互選 単語定着シートのポートフォリオ化協議、統一シラバス協議

第2回2015年2月16日 当大学にて（非3名、筆者）

テキスト・単語テストの確認、シラバス確認、placementテストの協議

第3回2015年3月11日 非常勤予定者の大学にて（非1名、筆者）

単語ポートフォリオに向けたワークシートの改良

開かれた英語教育を目指して：チームティーチングからコラボラティブティーチングへ

第4回2015年3月14日 追手門学院大学梅田サテライトにて（非2名、筆者）

講読テキスト教材研究 タスクに関する精査

第5回2015年3月25日 当大学にて3名（非2名、筆者）

英会話テキスト教材研究 タスク教材、単語帳の総称名称、小テスト作成及び確認

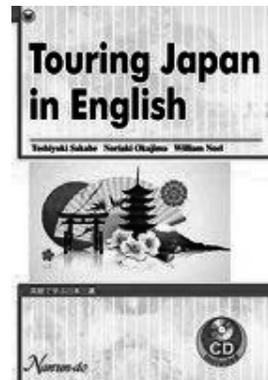
授業開始に至るまでに、全員が方向性を統一し協議を重ねる必要があったが、これらは新たな英語教育を目指していくための布石として必要不可欠なものであった。授業開始後も、授業前後やメールで、授業の感想など気付きをメーリングリストで共有し、学期終了後は振り返り及び今後に向けた打ち合わせを行うことで教員間のreflectionを行っている。

（参考までに）

- 1 回生用input選定テキスト 英語講読・英会話（各90分@1週）
英語講読（各章約380語）＋ 単語帳 ＋ 英会話（各章約160語Pair work）



Average Grade Level 12.7



Average Grade Level 10.8

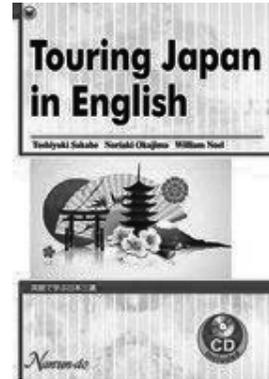
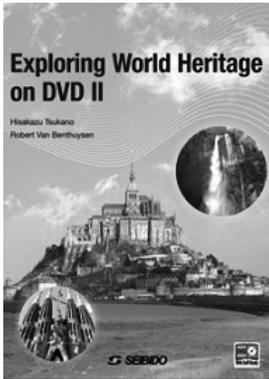
共通配布物

英語講読 理解促進用ハンドアウト＋テキスト対応単語冊子

英会話 理解促進用ハンドアウト＋ポートフォリオ用単語シート

英語講読、英会話とも毎回共通単語クイズを実施し、英会話では、「英語で説明する日本の文化必須表現100」ワークシートをその作業スケジュール表と共に配布し学生が一年かけて単語ポートフォリオを作成する。input中心の授業を展開したが、暗唱（全クラス共通90 words）や学年末最後の各クラス内グループプレゼンテーションに向けたループリックを配布し、inputからoutputへの意識を促した。

- 2 回生用output用選定テキスト 実用英語（2 限連続授業@1 週）



共通配布物

世界遺産背景知識クイズ・文法解説ハンドアウト・単語クイズ用シート

グループプレゼンテーション、グループポスター発表用ルブリックシート並びに評価シート

秋学期より、各クラスともにoutputを意識し、2年時最終授業では、学部合同リサーチフェアに向けたライティング、スピーキング指導に入り、グループポスターセッションやグループプレゼンテーションを合同で開催し学生もその評価に加わった。

6. まとめ

本稿は、2年前に新設された地域総合学部での同一シラバス同一テキストによる学部と連携した英語教育を目指した、Team Teaching の概念とは一線を画した協働体制Collaborative Teachingのもとでの2年にまたがる英語教育プログラムの実践報告である。学習理論に裏付けられたcollaborativeな教育実践を通し学生の英語発信を通して英語力を強化するというゴールに向け、それぞれの教員が責任を共有し、協議を重ねてきた。そして、そういった切磋琢磨の中から互いに新たな刺激や気付きの中で、協働で可能となる大学英語教育を目指した。「英語の授業で、学部で学ぶ内容を知ることができ、大学教育の意義を感じた。」という1年生の感想や、日本文化や地域社会に興味を持ち、海外の学会で英語発表し奨励賞を授与された2年生達など、確実に彼らの中に英語に対する認識の変化があると感じている一方、この英語プログラムを通して学生の英語力が、認知的側面も含めどのように変化していったのかその効果についても今後調査していく必要がある。特に、学生の量的および質的測定を通して客観的効果を測る必要がある。一般教養としての英語から脱却して、専門性の高い英語、キャリア英語につながる英語を目指し、英語教育でのCollaborative Teachingの重要性を立証するために、その効果を検証することで、地域創造学部及び社会学部以外の他学部英語教育においてもCollaborative Teachingの取り組みを進め大学が目指す英語教育の統一ゴールを探ることが可能になると思われる。

References

- 重森臣広・宮浦崇・田林葉・飯田未希・西出崇（2016）「英語教育における「開放性」— 学部の専門性にもとづく脱自己完結型英語教育の考察 —」立命館高等教育研究10号（p.p. 79-95）
- 重松敬一・井戸野佐知子・勝美芳雄（1995）「ティームティーチングによる算数・数学教育の実践的研究（1）」奈良教育大学紀要 第44巻第1号（p.p. 19-32）
- 中尾陽子（2011）「ティームティーチング—ラボラトリ体験学習における意味を探る—」人間関係研究 南山大学人間関係研究センター vol.10（p.p. 111-136）
- Storch, N. (2013). *Collaborative Writing in L2 Classrooms*. *Multilingual Matters*
- Krashen, S. (1987). Providing input for acquisition. *Principles and Practice in second language Acquisition*, 57-81. Prentice-Hall.
- Long, H. M. and Crookes, G. (1992). Three approaches to task-based syllabus Design. *TESOL Quarterly*, 26 (1), 27-58
- Swain, M. (1995). Three functions of output in second language learning. In V. Cook & B. Seidlhofer. (Eds). *Principles and Practice in Applied Linguistics*, 8, 125-144. Cambridge: Cambridge University Press.
- Swain, M. (2006). Languaging, agency and collaboration in advanced second language learning. In H. Byrnes (ed.) *Advanced language learning*, 112-130. *The contributions of Halliday and Vygotsky* (pp. 95-108) London., UK: Continuum.

Abstract

This study reports the two-year English program based on the collaborative teaching method at Otemon, which involves teachers of the same subject in a single department at the university, interacting as a group to achieve a unified goal. This teaching method tries to avoid the higher possibility of variability in degree of the textbook level and the evaluation based on teachers own beliefs. This teaching method provides both a consistent quality of academic achievement and confidence building among the students, with the two year duration enabling students to jointly hold a big research fair to make great presentations as well as poster presentations in English. The group coordination matches teachers' devotion with their strong sense of responsibility, and discussions of textbook selection, materials, handouts, time to be spent to complete a task together for each subject are the main key factors to this English education program's success. Another beneficial characteristic of this program is the ability to associate the contents in the selected textbook with other required courses of the department.